

## 市川手をつなぐ親の会権利擁護委員会 pai(ぱい)の活動

### 1. 発足

2002年4月に発足。

会員の構成・・・市川手をつなぐ親の会会員の希望者 現在50数名(学齢期の親がその3分の2以上を占める)会員は親の会会員で構成されるが、プロジェクトごとに他の専門家や支援者の協力をいただいている。  
発足の趣旨・・・市川で安心して、あたりまえに暮らしていくために、地域への理解を積極的に進めていこう。

### 2. 安心アンケート実施・・・pai の最初の活動(2002年6月～7月)

趣旨・・・一市民として、一人の地域の子どもとして、日常的に接する社会資源や機関、地域の人々についてどんなことで困っているか、どんなことに助けられているか、を会員対象のアンケートを実施。それを持って、地域の人々に聞いてもらう。

内容・・・ 警察や交番 病院・保健所 交通機関 就労 消防・救急  
ご近所・自治会・民生員・地域など 消費生活  
通学や通園・通所の途上のこと 商店街・コンビニ・遊戯施設のことなど  
男女交際・性の問題 の10項目

アンケートをてがかりに活動を始めた項目について

- ・警察や交番アンケートのまとめ(堀江まゆみさんにより集計・分析)、親の会による活動(後述)
- ・病院・保健所のまとめ(於保真理さんにより集計・分析)、親の会による医師会との連携(後述)
- ・交通機関のまとめ(堀江まゆみさんにより集計・分析)、その結果をもとに、エコ財団との懇談会
- ・ご近所・自治会・民生委員・地域等(親の会により集計)、民生委員プロジェクト、ご近所プロジェクト実施
- ・消費生活のまとめ(名川勝さん、於保真理さんにより集計、小冊子にまとまる。)
- ・商店街・コンビニ・遊戯施設のことなど(親の会により集計)、福祉職員集団によりコンビニプロ開始。
- ・その他の項目は、親の会により集計済みであり、順次、活動を実施していく見込み

アンケートの結果概要

- ・回答率など・・・配布数 737名、回収数 332名、回答率 45%
- ・多かった回答順・・・警察36%、医療34%、交通29%、通学途上22%、ご近所20%

アンケートの印象

- ・幼児や学齢期の人達の回答が、いきいきと具体的で、困ったことも、うれしいことも多く遭遇している。
- ・大人になると、生活は平板になり、日中活動の場と、家との往復が殆どで、地域との結びつきが薄くなっているように思われる。
- ・どこから取り掛かるかについては、出会いのあったところから、縁のあったところから。その後は、これらの動きの中から、会員が自主的に、機関との連携を取りはじめている段階。(たとえば、警察プロや学校プロなど)

## 親向け元気が出るワークショップ・3回連続開催(2002年6月～11月)

趣旨……pai発足をきいて、どんなことが知的障害者のまわりに起こっているかを知って、その上で元気に地域にいらしていただくための、親向けワークショップを開催。(80名参加)

1～2回目……2002年6月20日、9月13日、野澤和弘氏により、地域でどんなことが起こっているか、それらを踏まえて、どんな安心ネットが必要か、警察プロジェクトなどの現況が報告された。(100名参加)

第3回目……2002年11月15日「元気が出るワークショップ 支援費で元気になる」(80名参加)

講師 野澤和弘氏、朝比奈ミカ氏

効果……この3回連続のワークショップで、多くの親は、初めて、知的障害者のまわりでどんな虐待や被害が起こっているかを知って、大変ショックを受け、警察プロジェクトなどの必要性や、知的障害のことを地域に知ってもらうことの必要性を知った。また、第3回目ワークショップで支援費を使って地域で暮らすことに期待と元気をもらうことが出来た。

## 4. 市川市地域福祉計画地区別懇談会への参加(2002年6月～)

策定期間……2002年2月～2003年3月

地区別懇談会開催……2002年6月～12月、7地区(各地区でさらに地域割りをして、全24グループで実施)

paiとしての参加のしかた

・策定委員 1名(親の会代表)

・地区別懇談会各グループに団体推薦と公募を使って、参加。のべ50名前後の参加。

参加した親からの感想・意見

- ・地域にいろいろな人がいることを知った。
- ・自分達の思いを語る事が出来た。
- ・障害のある人の生活や思いを、地域の多くの人あまり知らないことがわかった。
- ・特学のこと、作業所のこと、生活ホームのことを語った。
- ・多くの地区懇談会で寄り合い所・地域の拠点の必要性があがっていたが、そこに知的障害のある人もうまく使えるものにするために、どうしたらいいのだろうか。
- ・各2回づつの懇談会で地区の課題をあげていったが、これは継続しなくては意味がないと思った。

地域の人達からの意見

- ・どのように接したらよいかわからない
- ・声をかけづらい
- ・ふれあいの場がわからない
- ・悩みを相談してほしいなど

地区別計画への参加の意味

このような形で積極的に地区別懇談会に参加したグループは親の会以外になく、他はむしろ、従来の地域役員に動員がかかっていたの参加であった。結局、paiから障害の子を抱える若い世代が多く参加し、地区別懇談会の今後の意味(いろいろな世代、いろいろな人達を包含する地域)を考えると、

paiの参加は、それなりの役割を果たしたと思う。

また、地域の人達が知的障害の人を「まったくにも分からない人達(保護すべき人達)」という捕らえ方をしている人も多いこと、生活実態をまったく知らない人達も多く、そのためにも「知的障害のある人を理解してもらおう」プロジェクトの大切さを感じた。

#### 地域福祉計画の今後

- ・地域福祉計画地区別計画の策定へ
- ・福祉寄り合い所を各社協支部へ設置の方向
- ・社会福祉協議会地域活動計画策定へ、それとの連携
- ・paiを中心として、親の会はこれらの計画に積極的に参加し、地域の一員として活動していきたい。

## 5. 民生委員プロジェクト(2003年1月~)

趣旨・・・民生委員が市川市内に350名もいること、各地区に配置されていることを知り、地域への理解の活動の第1歩として、民生委員さんへのアプローチを図ることに決まった。

#### 実施への過程

- ・趣旨を理解してもらうために、会員の知り合いの市川市民生委員副会長さんとの話し合いをする。
- ・社会福祉協議会の民生委員担当の職員に趣旨を説明、協力をしてもらう。
- ・市川市民生委員連絡協議会会長宛に、協力依頼文を社協を通して、送る。

#### 民生委員地区連絡協議会へ参加(16地区中、15地区へ)

- ・参加の方法・・・連絡協議会の時間内でほぼ30分時間をもって、知的障害者について説明をする。
- ・参加者・・・・・・親の会民生委員担当役員と、各地区に暮らすお母さん達がそれぞれ各3~5名ずつ。延べの親の会参加者数は、70名前後。民生委員参加者数は、300名前後。
- ・内容・・・・・・「知的障害のある人を理解するために」のパンフを配布。その生活、思いを説明する。ご近所アンケートの内容を説明する。(資料 別添)  
各地区の資源マップを配布。この地区にどんな福祉資源があるかを紹介する。(資料 )  
地域のお母さん達により、本人の地域での暮らしを具体的に報告する。  
地区連絡役の親を紹介し、何かあったら、連絡してほしいと伝える。

#### 参加しての感想など(2003年3月17日報告会)

- ・殆ど全員の人が参加してよかった。とても熱心に聞いてくれた。との感想。
- ・とにかく、人数が多く、視線が集中してとても緊張した。
- ・その後、コンサートのお誘いなど、具体的なお誘いを受けた人、声をかけられた人が多い。
- ・民生委員はお年寄りが多いと思っていたが、いがいと若い人も多く、作業所を作っているといったら、何かお手伝いすることは、ないかと聞いてくれた。
- ・各地区福祉資源マップをとても熱心に見てくれた。各地区のことはとても関心があるようだ。
- ・地域福祉計画地区懇談会で顔みしりになった民生委員さんがいて、とてもなごやかに話が進んだ。会終了後、これからいろいろお話していきましょと声をかけられた。
- ・民生委員さんは、たくさん障害のある人をみかけてはいるけれど、どうしていいかわからなかったと、いう人が多かった。気軽に声をかけてほしいと、伝えた。

- ・でも、声をかけてもらっては困る障害のある人もいて、それをどう伝えたらよいかと、迷った。
- ・この地元で生活していきたい。地域の行事、学校行事にも積極的に参加していると伝えた。
- ・障害のある人の作業所・学校がない地域でみなさん、あまりみかけることがないようだった。
- ・自立に向かって日々暮らしているという話をした、どこまで理解してもらえたか。(一人下校の話。生活ホームでの暮らしを望んでいることなど。)
- ・息子との日々の暮らしを語った。あまりのすごさにびっくりしたようだった。作業所づくりをしていることも紹介すると、お手伝いすることがあったら、声をかけてといわれた。
- ・皆さんから見守られているので、ここを引っ越せないと言った。
- ・「道路の真ん中を歩いている子がいるのだけれど、そんな時、どんな注意をしたらいいのか」と聞かれた。
- ・「名前がわかったら、親しみやすいし連絡が出来るのだけれど」
- ・あれっという発言や質問もあった。理解されていないことを知った。
- ・「お願いばかりしてはいけない」とかの意見もあった。
- ・もっと時間がほしかった。

### 民生委員プロジェクトの評価

- ・多くの参加者がとても緊張しながら、子どもへの思い・自分の生活を語ることが出来てよかったといっている。多くの民生委員さんも知的障害のある人をみかけてはいるものの、どんな生活をしているのか、どんな思念が必要なのかを知らなかった。遠慮もあつたらしい。
- ・多くの参加者がその後、民生委員さんと道などであって、声をかけられたり、援助をもうしだされたりしている。
- ・地域のお母さんが、地域の会に参加することに意味があつた。そのことで、この試みをとても好意的に受け止めてもらえた。
- ・このことにより、母親達の自信につながつたと思われる。
- ・『地域へ』の第一歩として、地域福祉の人的資源の核の一つである、民生委員さんを対象にしたことはまずは、大成功だつたと思う。

### その他

民生委員さんは地域の名誉職のような印象をもっていたが、若い人、女性も多く、真摯な民生委員さんも多かつた。今後、大切な理解者として、固定観念を持たず、付き合つて行きたい。

その後、チャリティ映画会に民生委員会長さんがお孫さんを連れて参加してくれるなど、様々な、お付き合いが出来ている。

### もう一つの地区民生委員との懇談会(2003年8月1日)

15地区を対象にした地区民生委員連絡協議会への参加のあと、南行徳地区の民生委員さんから声がかかり、懇談会の申し入れがあつた。

事前に地区民生委員さんたちは、福祉施設などを見学。

当日、その報告と、親の会からの説明で、2時間の時間をいただくことができた。

親の会からの内容は、地域の作業所の日々の様子をビデオで、障害のある人が生まれてからたどる道を簡単にお知らせし、各段階の地域の親から、暮らしの様子、思いなどを伝えた。

民生委員さんからは、明るく子育てをしている様子に感動したこと、それらを子育てに困っている一般のお母さん達の役に立てないかというような意見をいただいた。

この懇談会が、後に続く、ご近所プロジェクトの下地になつた。

## 6. 医療プロジェクトの取り組み(2002年6月～)

趣旨…先の10項目生活アンケートの中で、困っているという回答がもっとも多かった。医療がきちんと受けられることは、地域で暮らすためにはもっとも大切な事柄であるため、医療機関との連携の必要性を感じた。

### 実施にいたる経過

医師会会長の土橋先生に、医療アンケートをとったこと、その内容を聞いてもらいたいと要請。快くおうじていただいたことから始まる。(土橋さんは地域福祉計画策定委員の副座長であり、同じ策定委員として親の会からも参加していて、面識があった。)

### 医療懇談会の実施(聞き取り 於保真理さん)

医師会との懇談会の前に、親の会会員を対象にした、医療懇談会を2回実施した。

第1回目…9月9日、普段の生活において、お医者さんとどうつきあっているか。なにを困っているか。

第2回目…9月20日、告知と療育機関にたどりつくまで

### 第1回医師会との懇談会(2002年10月9日)(資料 別添)

- ・ 2002年10月に、地域医療に関心のある、8名の医師にアンケート結果、市川での知的障害者の暮らしなどを、医師会館において聞いていただく。
- ・ アンケート結果から(於保さんより)
  - よかったこと
  - 待ち時間の困難さ
  - 本人の抵抗で受診できなかったこと
  - 傷ついた言葉など
  - 病院に望むこと(障害のある患者本人への声かけに配慮を。障害の理解をしてもらいたい。待ち時間がつらい。など)
- ・ お医者さんから
  - 障害について、最初に付き添いの人から説明をしてもらいたい。
  - 待ち時間や、診療に際しての配慮など遠慮なく伝えてほしい
  - 障害を持つ人に悪い医者は一般の人にも悪い医者。よい医者を探すことが近道など

### 医療セミナー開催(2003年10月4日、市川医師会館にて)

- ・ 参加者…170名(市内の医者、千葉県医師会、千葉県障害福祉課、保健師、看護師、薬剤師、養護学校教師、市川市行政、福祉施設関係者、親の会など)
- ・ 開催次第
  - 『自閉症や知的障害をもつ人の医療に関するセミナー』
  - イ 市川に暮らす障害を持つ人はどこでどんな暮らしをしているか…コーディネーター飯村相楽
  - ロ 親の会対象医療アンケートからみえてきたもの…神奈川工科大学 於保真理
  - ハ 千葉県地域福祉支援計画について…千葉県健康福祉政策室 野村隆司
  - ニ 「知的障害を理解してもらうために」の活動について…毎日新聞記者
  - ニ 基調講演『自閉症・知的障害とは、-その医学的見地から-』…旭中央病院外科部長 大屋滋

\*別添資料として

市川福祉マップ

パンフレット『医療機関とのよりよい関係を求めて 知的障害のある人を理解するために』

(資料 および説明カード別添)

医師向け「自閉症や知的障害をもつ人の医療に関するアンケート」の実施

- ・ 期間・・・2003年9月から10月
- ・ 主催・・・市川市医師会・市川手をつなぐ親の会
- ・ 回収率・・・医師会会員である262機関のうち、108機関より回答。回収率41.2%。
- ・ 結果・・・「手をつなぐ」2004年1月号に掲載(筆者 於保真理さん)(資料 別添)

回答の概要

83パーセントの医療機関が診療経験あり

困ったこと(コミュニケーションがとれない、訴えが分からない、診療中動いてしまうなど)

これからどういうことが必要かについて(あらかじめ、障害のあることを伝えてほしい、どのように対応したらよいか教えてほしいなど)

\*詳しいアンケート結果は、於保さんによりまとめられている。

医療パンフレットを市内全医療機関262ヶ所に配布

医療説明カードを親の会会員へ配布(2003年12月)(毎日新聞千葉版に掲載。資料 別添)

医療との連携について・その効果や反響

- ・ この取り組みについては、県内外の福祉関係者から大きな反響と評価をいただいた。医療機関の門がそれだけ高かったことといえる。県内の他市でも医療機関へのアプローチが始まった。
- ・ 医師会長さんが率直に、「医者というものは、殆ど、知的障害についてわかっていないと思う。」と語ってくださった。その理解が進めば、診療時の困難さがずいぶん軽減できると思われる。
- ・ そのため、知的障害をもつ人の家族や関係者は、もっと、積極的に障害のことを説明し、わかってもらう努力をしていかななくてはならないとも思う。
- ・ 医療機関側が、施設の重症心身障害者を訪問したり、施設職員の障害者医療に関する相談に乗ったりと、親の会以外との連携も始まった。
- ・ 今後、市川の障害者の高齢化が予想される。障害者ドッグなどが必要になってくる。今後とも、連携を深めていきたい。

## 7. ご近所プロジェクト開始(2003年12月～)

趣旨・・・民生委員プロジェクト、地域福祉計画地区別懇談会に参加して(延べにすると、120名の会員が参加したことになる。特に学齢期の会員が多く参加した。)、この活動の大切さや、意義などに気づき、もっと本格的に、地域への活動をしてみたくなった。特に、二つの取り組みは時間が短かったのも、もっと、きちんと障害のことを説明したいという気持ちも高まった。

実施にいたる経過

- ・ 市川では、地域ケアシステムが14社会福祉協議会支部に順次、設置されようとしている。 - 6 -

この時期に既に、4ヶ所に設置されていて、福祉寄り合い所ともいべき拠点(相談と立ち寄り所として)が各地区に設置され、活動をしていた。まずはその地区から開始することとなった。

- ・ まず、第1回の地区として、市立養護学校を背後に控えた地であること、キーパソンのいる地であることなどで、真間地区を対象に選んだ。

#### 真間地区プロジェクト(「手をつなぐ」3月号に掲載。資料 別添)

- ・ この趣旨を真間地区担当社会福祉協議会および、市川市地域福祉支援課に相談、応援を依頼した。
- ・ 8月より、真間地区地域ケア推進会議に参加させてもらう。(11月まで数人の親と、作業所職員が参加)
- ・ 12月開催に向けて、4回の会議に参加、次第に成功に向けて、両者の気持ちの一致を見るようになった。地域の方々が準備にむけて、奔走してくれるようになった。
- ・ 「知的障害者のことを知ってください」というチラシが、回覧板と自治会掲示板に掲載された。(資料 朝比奈ミカさん作成。別添)

#### 真間地区懇談会当日内容

- ・ 親の会についての説明
- ・ ビデオ上映(ご近所プロジェクトのために、市内の知的障害児者の生活の様子を撮ったビデオ)
- ・ 作業所職員による「知的障害・自閉症について」の説明
- ・ 地区の5人のお母さん達による、各世代別の体験談
- ・ フロアとの質疑応答

#### 真間地区懇談会の参加者

自治会役員、民生委員、母子推進委員、青少年相談員、商店連合会、消防署、消防団、NPO、養護学校教師、近隣小・中学校教師とPTA、近所の方々、行政(保健福祉局長、地域福祉支援課、障害福祉課)、社会福祉協議会、親の会(20名) 以上、計80名

#### お母さん達の発表について

##### 告知の頃からのこと(特学低学年)

家業を継がなくてはならないので、同居の義理の両親に、我が子の障害のことを知らせるのがとてもつらかった。でも、その両親もいまではよき理解者になってくれていること。

##### 中学校までのこと(養護学校中学部)

引越しをしてきた。考えに考えてこの地を選んだが、受け入れられるか心配だったが、今では暖かく接してくれている。こんにちわなどと、商店街に人達から挨拶をしてもらっている。

自傷行為や睡眠障害を親子で乗り越えてきた。

兄弟のためにも、暗い母では駄目だと思い、乗り越えた。

##### 高等部までのこと(養護学校高等部)

さまざまないたずらを地域のみなさんにしてきた。その都度、謝りにいったが、何時も、やさしく許してもらった。

登下校の最中に、おもいがけず、さまざまな人から助けられていることが、わかった。

学習をかねて、一人で床屋に行ったり、買い物にいたりしている、その都度、協力していただいている。

家族にとっては普通の子、かれらのことを知ってほしい。

##### 学校を卒業して(19歳)

母親の自分は当然、年取っていく。それでもこの地域で暮らしていけるかと、不安である。

生活ホーム、ホームヘルパー、ボランティアの助けを借りて、暮らして行ってほしいと思っている。

高齢を迎える(母親77歳)

真間で生まれ、真間で育っている。娘は48歳になること。(その間の様々なエピソードを紹介)

ここで暮らし続けていきたいと思っている。

フロアからの質問・感想など

消防署職員から・・・事故にあいやすい人達であること。一人住まいの知的障害者の場合、119番通報のとき、どうしたらよいか。既往症、かかりつけ医などの情報をしりたい。

養護学校から脱出してきたらしい子を見つけたらどうしたらよいか。

養護学校の先生から・・・時間外に見かけたら、ちょっと、様子を見てほしい。本人に断って、連絡先などの記入がないかを見てほしい。

交通事故にあった本人。商店街の連携で学校に知らせることが出来た。

商店会の人・・・こういう機会、話を聞いて本当によかった。お母さん達に感謝と敬意。

今までは、同じ人間と思っていたが、むしろ、障害の会う人は上だと思えるようになった。感動の日だった。

商店会の人・・・温かく見守っていききたい。あまり、しつこくすると、精神的に苦痛だと思えるのでおおらかにやっていきたい。

青少年相談員の方・・・お母さん達の実話の話に感動した。話しにくいこともあったでしょうに・・・

今日の話を聞いたからといって急に話しかけたら何かと思うだろうから、少しずつよくなるようにと心がける。

消防団の方・・・話しづかったことも話してくれてありがとうございます。サッカーのチームのコーチをしている。海外では、障害のある子が同じグラウンドと一緒にサッカーをやっている。そんなこともやっていきたい。

教育委員の方・・・それぞれの思いを語っていただき、今までの長い教員生活で自分達は何をやっていたんだらうと思っている。小さいときから「地域」で、ということが、大人になって暮らしていけることになる。

地域の方々には、ちょっとした配慮を、ちょっとした援助をしてもらいたい。

真間地域ケアの方から・・・他の地域でも、このような試みをやってみてほしい。など

\* (開催要項 資料 、 ご近所向けパンフレット 資料 別添)

ご近所プロジェクトの感想・評価など(地方新聞2社に掲載される。資料 別添)

- ・ 感動的な1日であったと思う。真間地区推進会議の方々、行政、社協、親の会が一体的になって、会の成功を導きだしたと思う。
- ・ 地域福祉計画の一つの具現化と位置づけられると思う。
- ・ 知的障害のある人を毎日みかける地域であっても、その生活や暮らし、思いを始めて知ったという方が多かった。こういう活動の大切さを思った。

## 8. 警察プロジェクト(2003年10月～)

趣旨・・・安心して地域に暮らすための最大の味方はやはり警察。警察官に理解が必要。

経緯・・・6月18日に市川警察署と行徳警察署の生活安全課長を訪問。警察プロジェクトについて、説明。

生活安全課と親の会懇談会の開催(2003年10月23日、堀江まゆみさん参加)(開催要項資料 別添)

- ・ 内容・・・生活安全課の仕事について

知的障害をもった人が行方不明になってしまった時の、親の対応方法

生活安全課で知的に障害をもった人を保護したときの様子や困ったことなど  
親の会警察アンケートの報告(堀江さんより)  
全国展開されている警察プロジェクトの報告と、熊谷事件の概要について(堀江さんより)

『いざという時の為に!!』チラシ、会員へ配布(2004年2月)  
生活安全課との話し合いを、チラシにまとめ全会員(700名)に配布。(資料 別添)

もう一つの警察プロジェクトの動き・被害から身を守るワークショップ  
(「手をつなぐ」3月号に掲載、資料 別添)

- ・ かしわい苑のコーディネーターを中心に、被害から身を守るための警察ワークショップが展開された。
- ・ 2003年11月27日・・・市内知的障害者本人20名参加、市川警察4人参加
- ・ 2004年1月30日・・・市内精神障害者と生活安全課との懇談会

## 9. 学校プロジェクトの開始(2004年2月～)

趣旨・・・真間地区懇談会に参加した学齢期のお母さん達から、学校の先生・PTA・生徒を対象にした活動を行いたいという希望が相次いだ。特学では、常にかからかひやいじめなどがある。また子どもの時期に正しい知識や優しい心を持つことが大切という認識から。

### 開催への経過

元養護学校の校長をしていて現在、市川の教育委員をしている方に、その願いを伝えた。生涯学習センターや、教育センターに同行していただいて、その願いを研修担当の職員にきいてもらった。

鬼高小学校の家庭教育学級にて「理解」のための母親達の意見発表(2004年2月17日)

\*鬼高小は特学は設置されていない。

内容・・・「多方面からみた親育て・子育て」教育委員の先生の講演  
障害児の母親3人による体験発表

### 参加した母親の感想

- ・ うなずきながら聞いてくれた。それぞれの小さい頃からのそれぞれの思いを語った。
- ・ 可愛そうな話にしたくなかった。言いたいことは山ほどあったが、前向きな話をした。
- ・ 本来なら特学に行く子が、鬼高小に通っている。担任の先生から、彼がいることによって、思いやりのあるクラスになったといわれていることを話した。
- ・ 発表のために、今までを振り返ることが出来た。子育てをしてきてよかったと、思った。
- ・ 終了後、校長先生から、心にしみたと、暖かい言葉をいただいた。
- ・ フロアのお母さん達からの、この試みに対する感動の言葉をいただいた。

### この活動の評価・感想

- ・ その後も、学齢期の母親から、自分の学校にもはたかきかけたという意見が相次いだ。
- ・ 学校プロジェクトはまず、このように家庭教育学級からが始めやすい。  
それから、教員・生徒につなげていきたい。

## 10.2年間のpaiの活動を振り返って・その評価と意義

### 意味

- ・ 大勢の親たちが参加できたこと。
- ・ 親の会の経験がないか、浅い若い親たちが多く参加できたこと。
- ・ 親たちが今までの子育てや、思いや、暮らしぶりなどを自分の地域の人達に伝えることに、緊張はしたが抵抗がなかったこと。自分達の生き方への自信と、子どもへの愛情の現われを意味すると思う。
- ・ この地域で暮らしたいと、一貫して伝えられたこと。
- ・ 地域の人達と多くの出会いや、その後の関わりが生まれたこと。
- ・ 地域の一員としての責任や義務も背負ったこと。
- ・ 一つの課題に取り掛かると、次々と新しい課題に出会い、あたらな展開が出来た。
- ・ どのプロジェクトも一般の参加者がとても熱心に聞いてくれて、評価してくれたこと。
- ・ 多くの地域の人達が、知的障害のある人の生活や思いを知らなかったことがわかり、この活動の必要性を思ったこと。地域にはいろいろな人がいることを知ってもらいたい。

### 課題

- ・ 母親達の体験発表という形をとっているが、今後、本人達の参加をどうしていくか。
- ・ 作業所単位・施設単位の地域との交流にもつなげていきたい。
- ・ 地域に一員として、親の会として出来ることは何かを探していきたい。
- ・ 福祉寄り合い所が各地区に出来てくる。それを障害のある人にとっても、大切な場にするためにはどうしたらよいだろうか。

# paiの活動

## 市川手をつなぐ親の会権利擁護委員会

2002年4月から2004年3月

1. paiの発足
2. 生活安心アンケートの実施
3. 親向け・3回連続・元気が出るワークショップ開催
4. 地域福祉計画地区別懇談会への参加
5. 民生委員地区連絡協議会へ参加
6. 医療プロジェクト
7. ご近所プロジェクト
8. 警察プロジェクト
9. 学校プロジェクト
10. paiの活動をふりかえって